

まえがき

1954年版讃美歌集の148番「すくいぬしは ハレルヤ」は、復活祭(イースター)に最も親しまれ喜びと勝利に満ちた讃美歌として長い歴史を持ちます。ところで、全く同じメロディーを持つ英語訳讃美歌が欧米に二曲存在し、しばしば混同されます。主題が同じで、歌詞も構造も似ているからです。

1. 起源: 14世紀のラテン語賛歌

原詩は14世紀のボヘミア(現在のチェコ)で書かれた、ラテン語のイースター・カコル「Surrexit Christus hodie (キリストは今日よみがえられた)」が元になっています。初期は復活の物語を語る11節(後に16節)の歌詞でした。当時は修道院の聖歌隊などが歌う単旋律のシンプルな聖歌(グレゴリオ聖歌のスタイルに近い)でしたが、現代までの間に幾多の改変を経ています。

2. ドイツ語圏への展開 (15世紀-17世紀)

15世紀から16世紀にかけて、チェコのボヘミア兄弟団などによって歌い広められ、宗教改革を経てドイツ語翻訳版『Erstanden ist der heilige Christ』(聖なるキリストは蘇られた)が広まると、バツハ以前のルター派教会で重要なコラールの一つとなり、一般市民や農民も礼拝で讃美するようになりました。

3. 英語訳出版(1708年)、現在の旋律との組み合わせ

最初の英語訳は、1708年ジョン・ウォルシュ(John Walsh)によりロンドンで出版された『Lyra Davidica (ダビデの堅琴)』という讃美歌集に、「Jesus Christ is Risen Today」(全3節)として、現在知られている「EASTER HYMN」の旋律と組み合わせられました。

4. Charles Wesley による発展(1739年)

メソジスト教会の創始者の一人、チャールズ・ウェスレー(Charles Wesley、1707-1788)が、1739年にこのラテン語(ドイツ語?)讃歌からインスピレーションを受けました。彼は原曲に、〈復活の歴史的な事件が信じる者すべてに与えられる『死に対する勝利』であることを証言する数々の聖句〉を織り交ぜ、会衆が力強く「ハレルヤ」と応唱できる形式に整えました。それが「Christ the Lord Is Risen Today」(全11節)です。このウェスレー版がイギリスを中心にイースターの代表的讃美歌として爆発的に広まりました。

5. 歌詞の修正(1749年)

1749年にジョン・アーノルド(John Arnold)の『The Compleat Psalmodist』にて歌詞が改訂され、現在一般的に歌われている形(第2・3節が大幅に変更されたもの)が定着しました。

6. 現代

現代では二つのメジャーな歌詞が、様々な教派や地域を超えて歌われていますが、歌集によっては、一節の歌詞に『Jesus Christ is Risen Today』を使い、二節以降にウェスレーの歌詞を混ぜた「ハイブリッド版」も存在します。1954年版『讃美歌』148番「すくいぬしは ハレルヤ」は14世紀のラテン語賛歌を典拠としていますが、原詩のニュアンスを保ちつつ日本語に要約しており、どちらの歌詞の翻訳とも言い難いです。『讃美歌21』325番はタイトルを「キリスト・イエスはよみがえられた」としていますが、歌詞は1954年版『讃美歌』を継承しています。聖歌では171番「よびとよ うたえ」、新生讃美歌では240番「救いの主はハレルヤ」です。